

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

ムーラム クライシス

The Legend of Muren Crisis

小説 竹内けん

挿絵 龍牙翔

第一章	霸王来襲	006
第二章	葡萄の貴婦人	048
第三章	飛龍騎士	093
第四章	合流	131
第五章	竜虎決戦	171
第六章	王都奪回	210

登場人物紹介

Characters



ケイト

王太子アリオーンの乳母子にして、頼りになる忠義の女騎士。クールで落ちついた雰囲気は漂わせるが、アリオーンの事になると烈火の如く熱くなってしまう。

マディア

ドモス王国の女将軍。飛竜に跨がり、アリオーンを追撃してくる。一見、怖そうなお姉さんだが、その実部下思いな顔を持つ。

フリーユネ

煮ても焼いても食えなさそうな貴婦人。妖艶な美貌を誇る熟女で、腹を探る事のできない老獪さを持つ。

グレイス

名門貴族の娘で、アリオーンが大好きな美少女。ケイトをライバル視している。

アリオーン

インフェルミナ王国の王太子。まだまだ幼く子供らしいところが抜けない童貞少年だが、王族として肝が据わった面も見せる。

『第二章 葡萄の貴婦人』より

「男に性欲があるように女にも性欲がありますわ。あの娘、忠義にかこつけて、殿下に抱かれる日を一日千秋の想いで待ち続けておりますわよ。いつまでも殿下が女の抱き方を知らないと彼女、発狂してしまうわよ」

「そ、そんな……」

男の性欲すら自覚していなかったアリオンである。女に性欲があるなどと考えたことがなかったし、まして、あのケイトに限って……という思いもある。

どう答えていいか戸惑っているうちに、両手がフリーユーネの乳房に触れさせられていた。
（や、柔らかい……トロトロだ……）

白磁のように青白い肌をしていたから、陶器のように冷たくて硬いかと思いきや、意外に温かくて柔らかい。

フリーユーネはさらに、アリオンの手の甲に自らの掌を重ねると、モミモミと揉んだ。

寝ているケイトの胸に悪戯して、その生乳に触れた経験はあっても、あくまでも触るだけで精一杯。とてもではないが、こんなに大胆に揉む勇氣などなかった。

それなのに、この女は無理やり揉ませたのだ。

（手に吸いついてくる。おっぱいって揉むとこんなに気持ちいいものだったんだ）

フリーユーネが手を離しても、我を忘れた少年は鼻息も荒く、モミモミといつまでも飽くことなく揉み続けてしまう。

「うふふ……気分に入ったようね」

三十代後半。子持ちのオバサマの乳房は、二十歳のお姉さまの乳房とはまったく別物だった。

柔らかく垂れ下がった乳房は、まさに熟れた葡萄。

（ああ、これって舐めたらやっぱ葡萄の味がするのかな。それとも飴細工みたいに甘いんだろうか？）

両手で乳房を弄んでいるうちに、舐めてみたい、舌で味わってみたいという強烈的な誘惑が湧きあがってきた。しかし、その願望を実行する勇気がなく悶々としていると、フリーユーネが促してきた。

「そうやって手で遊ぶだけではなく、しゃぶりついていいのよ」

「い、いいんですかっ!？」

まるで心を読まれたような誘い文句に驚愕したアリオーンだが、生唾を飲んで好奇心と恐れの入りに混じった表情でお伺いを立てる。

その表情が大人の女性の母性本能を驚掴みにし、子宮を締めあげたらしい。フリーユーネは満足そうな表情で、細い顎に指をあてがいながら頷いた。

「……ええ、あたくしのおっぱい、……思いつきり食べなさい」

「い、いただきますっ!」

頭が真っ白に焼ききれてなにも考えられなくなったアリオーンは、白い生乳を根元から絞り出すように握りしめると、頂を飾るワインレッド色をした乳首に夢中になってしゃぶ

りついた。

「っ!？」

甘くも酸っぱくもなかった。しかし、味覚とは違うなにかが男を虜にする。

「あん……激しい。うふふ……あの幼かった殿下が、すっかり牡になったわね」

嘲笑されてもはや止まらない。いや、止まれなかった。アリオーンはモミモミモミと乳肉を大胆に揉みしだき、左右のプリプリした葡萄乳首を交互に吸いしゃぶる。

口腔の中で、ムクムクムクと乳頭が突起してくるのがわかった。とっかかりができたことで、口内に含みながら、さらに舌先でレロレロと弾いた。

「うふふ……まったく殿下も、いつまでたっても乳離れできない困ったお子様のようすわね。まあ、乳離れのできた殿方など見たことがございませんが……ああ♪」

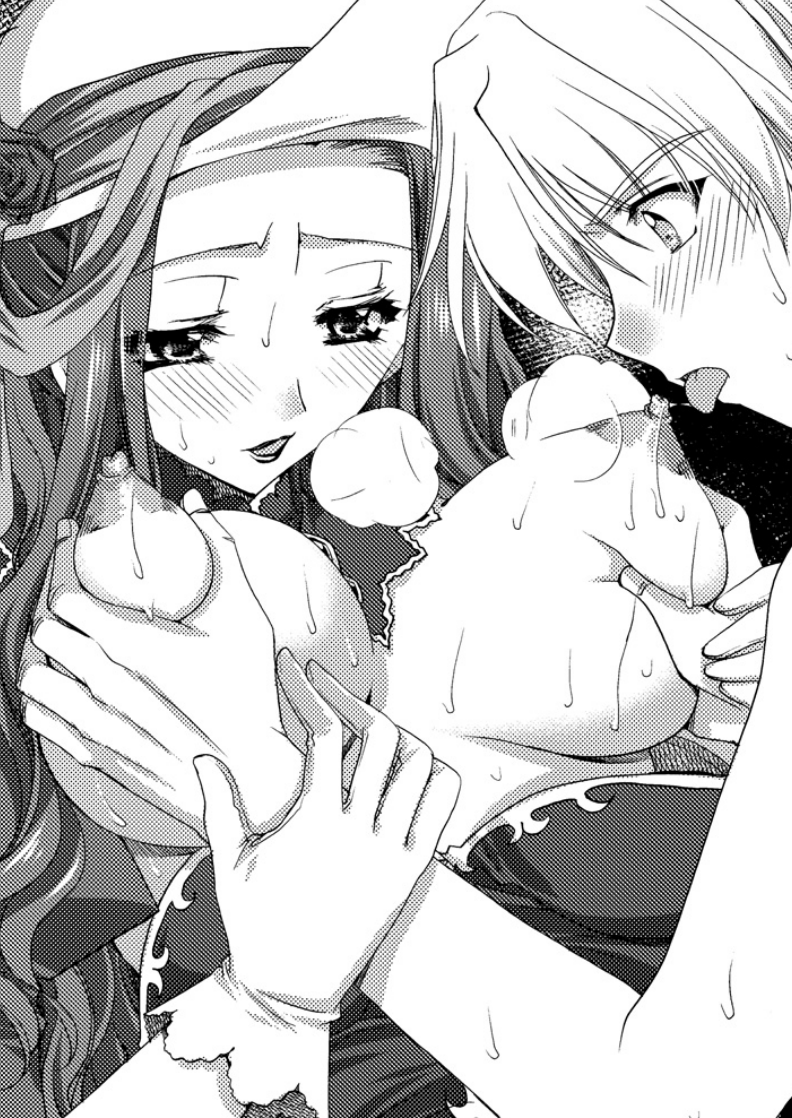
フリーユーネの声が少しずつ甲高いものになってきた。それが嬉しくてアリオーンの愛撫はさらに激しくなる。

「ああ……そんなに吸っても母乳など出ませんのに……まあ、昔は牛のように出た時期もあったのですが、ヴィオールに全部吸い取られてしまいましたわ……はあん♪」

無心な情熱をもって乳首を吸われまくった貴婦人は、顔を紅潮させつつ、肩を竦めてピクピクピクピクと痙攣した。

そんな反応にお構いなしになお舐めしゃぶっていると、ついに貴婦人が音をあげた。

「ふう……そろそろ、あたくしも、我慢できなくなってきましたわ……」



グレイスは、しばし逸物の尿道口とにらめっこしていた。

(そんなに真剣に見られると、ちよつと恥ずかしいなあ)

小さくて温かい手でニギニギと弄ばれていると、肉棒はとつくんととつくんと脈打ちながら先走りの液が溢れてきて、ついには少女の頬にタチンつと滴った。

「っ!？」

驚き目を見開いたグレイスだが文句をいわず、そのまますっかりと肉棒を両手で包んでいた。やがてアリオーンの顔に視線を転じると、にっこりと笑う。

「アリオーンのこれ、なんかかわいく思えてきちゃった……」

「そ、そう……?」

戸惑うアリオーンから視線を下ろしたグレイスは、亀頭部に向かって話しかける。

「おちんちんさん……これからわたくしの貞操をあげるけど、痛くしちやいやよ」

そういつたあと、グレイスはチュッと亀頭部に接吻した。

(おちんちんにさん付け……)

まるでいまの接吻に魔法でも掛けられていたかのような気分だった。

いままでアリオーンは、グレイスのことを才色兼備のすごい少女だよなあ、とは思っていたが、どこか苦手意識を持って避けていた部分がある。

しかし、いまの接吻で逸物が、身体が、そして心が燃えた。

グレイスのことがどうしようもなく愛おしくなったのだ。

「もういいね。入れるよ」

獸欲を抑えかねたアリオーンは、グレイスから逸物を奪い取ると、腰を引いた。そして、改めて少女の細くて長い脚の足首を持ってV字開脚にすると、いきりたつ男根を、ピンク色で綺麗すぎて、どこか作り物めいた印象を与える陰唇に添えた。

「じゃ、いくよ」

「ええ、いいわ……アリオーン、好きよ」

「うん、ぼくもだよ」

アリオーンの瞳は爛々と輝いている。それは肉食動物の目だ。一方、グレイスは怯えて涙目になっていた。それは草食動物の目だ。そして、牡としての征服欲のままに男根を叩きこむ。

ブチッ！

「ひい……！！」

亀頭部を押し入れられたグレイスが、苦痛の悲鳴をあげたのとは裏腹に、アリオーンは歡喜に震えた。

（くうく縮まるっ！ ケイトのときもそうだったけど、初めての女性って痛いくらいに縮まる……。これはケイトのときよりも縮まるう）

処女ならではのきつい締めつけ、というのもあるのだろうが、やはりまだお子様の膣洞ということだろう。穴自体が狭いようだ。

しかし、アリオンだってお子様である。あるいはちようどいいのかもしれない。
ズブ!? ズブブ……ッ!!!

まるで生肉を力づくで引き裂いたような感触の中、アリオンは容赦なく腰を落としていき、ついには男根が最深部にぴったりと嵌まりこんだ。

「はあ、あああ……やっぱり、大きい……奥にまで、奥にまで当たっているう……」

少女の両脚を肩に担いたアリオンは、屈曲位での挿入である。この体位は、男根が子宮口まで届く。

自分でも触れたことがない。女の最深部にまで男の剛直が突き刺さったのだ。その衝撃にグレイスは目を大きく開き、涙をハラハラと流している。

「っ!？」

鬼の目にも涙というのは、いいすぎにせよ。さすがに驚愕したアリオンは、気遣いの言葉をかける。

「だ、大丈夫? すぐ抜くから」

慌てて引っこ抜こうとするアリオンに、グレイスはぶんぶんと首を横に振った。

「あっ、待って! ……これって女が味わう通過儀礼だって聞いているから……わたくし我慢する。だから動いて……儀式を失敗させるわけにはいかないわ……」

涙目になりながらも決死の表情で主張するグレイスの健気さに、アリオンは胸を打たれた。



「うん、わかった……すぐ済むから我慢してね」

力強く請け負ったアリオンは、キュッキュッと強く締めてくる処女肉の中、腰をグリグリと回転運動させた。コリコリした子宮口で、亀頭部が捏ねられる。

「はう、ああ……ああ……痛い……ああ……痛いけど、なんか、わたくしの身体、アリオンに開発されているみたい……少しずつよくなって……」

悲鳴をあげたグレイスは、両手を伸ばして、アリオンの両肩を抱く。桜貝のような爪が立って少し痛かったが、破瓜の痛みを想像すれば文句をいえる立場ではないだろう。

グレイスを苦しめるのは本意ではないから、早くイってしまいたいと思う。しかし、幼馴染みの女の子の膣穴にせっかく入ったのに、すぐに出すのはもったいない、もっと味わい尽くしたい、という欲望がせめぎあう。

（うわぁ……グレイスのおま○この中って熱いなぁ。それに鬨が多い。鬨の一つ一つが深い気がする。おちんちん消化されそうだよ……もう我慢できない）

グチュクグチュクグチュク……

男女の結合部から卑猥で粘着質な水音が聞こえてくる。やがて熱い蜜壺を掻き混ぜていた男根が激しく自己主張を開始した。

「はう!? ……アリオンの、お大事が……ビクビクしている……?」

処女とはいえ、牝としての本能が、牡の射精の兆候を察したのだろう。グレイスは目を剥き、身体をこわばらせた。

「ああ、グレイス、グレイスのおま〇こ、すっごい気持ちいいよ！」

自重の限界を迎えたアリオーンは、獣の如き雄叫びをあげると、理性を失って、腰を上
下運動させる。

ブシュ、グチュ、ブチュ、グシュ……。

乙女の花園は、容赦なく踏み荒らされ、ひと突きごとに愛液が溢れ、ひと抜きごとに愛
液とともに女性の内壁がまくれ返った。

「ああああああああ!!？」

理性の人であるグレイスが、完全に理性を失ってしまったようである。目を見開き、涙
を流し、口を開き、喘ぎ声とともに涎を垂らしている。

しかし、牝として扱われることの歓びに、女の本能が目覚めてしまったらしい。恍惚と
した表情を浮かべている。

(あのいつも小生意気なグレイスが、ぼくのおちんちんのまえに屈伏しちゃったみたいだ)
牝としての情欲を存分に満足させたアリオーンは、高ぶりのままに身を任せる。

「ああ、出るよっ グレイスっ！ グレイスの中にいっぱい出しちゃうからね!!!」

「ひい……きて！ きてっ！ きて、わたくしの中にいっぱいきて！」

宣言すると同時に、歓喜に鳴く少女の子宮口に男根ががちり嵌まった。その状態でア
リオーンは思いつきり爆発させる。

ぶぢゅ!! どびゅぶぢゅびゅる! びゅびゅびゅ!!!

叱責されたからといって方法がわからないと、途方に暮れている幼君に、立ち去ろうとしていたフリーユネは足を止めて、背後に流し目をくれてから深く溜め息をつく。

「他力本願こそ殿下の持ち味とはいえ、なんでも他人に頼ろうとするのは感心しませんわね。女の抱き方くらい自修自得して欲しいところですけど、まあ、たしかに乱交の楽しみ方は伝授しませんでしたわね」

再度踵を返したフリーユネは、つかつかと歩みよってきて、ベッドの端に腰を下ろすと、手にした扇子を翳す。

「女を同時に全員、満足させようなどと考えるから失敗するのです。一人ずつ確実に果てさせればよろしいのですよ」

フリーユネは、弄んでいた扇子をびしっとケイトに付きつけた。

「な、なにか……?」

戸惑うケイトに、フリーユネは扇子を開き、パタパタと煽いでやる。

「今回の戦役の殊勲は、なんといっても坊やを守り抜いたあなただわ。だから、あなたが一番楽しむ権利がある。あなたから挿入されなさい」

「し、しかし……」

戸惑うケイトに、グレイスも得心した。

「そういうことでしたら、仕方ありませんわね。今回だけはわたくし身を引きますわ」
グレイスが潔く身を引いてくれたので、アリオーンも安心してケイトを促した。

「確かにケイトが守ってくれなければ、ぼくは間違いなく死んでいたよ。ぼくがこうして生きていられるのもケイトのお陰だ。その感謝の意味も込めて、いまはケイトに入りたい」

「ああ……で、殿下……もったいないお言葉です。わたしは当然のことをしたまでです」

真正面から感謝されて、ケイトの目はウルウルと潤む。

「そう謙遜することもない。確かにおまえが邪魔しなければ、このかわいい王太子はあたくし専用の肉奴隷になっていたよ。もつとも、おまえが要らないなら、あたくしがもう一度……」

「黙れ、貴様に譲るくらいなら、わたしがいただく」

マディアを一喝したケイトは、大の字になっているアリオンのいきりたつ逸物に恐る恐る跨がってきた。

アリオンはもちろん、フリューネ、マディア、グレイスといった同性たちが見ているまえで騎乗位での挿入は、ケイトのような生真面目な女性には精神的に辛いだろう。

動きがぎこちなく、緊張しているのがわかる。

ケイトは自ら肉裂を割り、赤い媚肉をさらした。それから頬を染めながら、いきりたつ逸物をゆつくりと挿入していく。

「ああああ……」

根元まで唾えこみ、どっしりと腰を落としてしまったケイトは気持ちよさそうに喘いだ。
(くう……おま○この締めつけのよさではケイトがダントツだなあ……ブツブツだったマ

ディアと違って、ケイトはザラザラしている……」

同じ勇ましき女騎士でも、マディアの膺はカズノコ天井、ケイトとの膺はミミズ千匹と、まったく別の触感である。

「ああ、ああ……で、殿下のおちんちんが……」

周囲の女たちに視姦されながらの騎乗位に、ケイトは恥ずかしそうだが、優越感もあるのか、いつも以上に気持ちよさそうに腰を使い始めた。

「うふふ……こうして、ただ見ているだけというのも芸がありませんね。グレイスちゃん、あなたは殿下の顔を跨いであげなさい」

「か、顔ですか？ ……はい、オバさま」

フリーネの指示に戸惑いを見せたグレイスだが、意を決してアリオンの顔を跨いできた。

無毛に近い肉裂が、アリオンの顔を覆う。

「ぼく、グレイスにも感謝しているんだよ。グレイスはみんなのアイドルだからね。グレイスの励ましで兵士たちは元気になれたんだ」

「と、当然ですわ。あなたをわたくしが支えるのですから」

顔面騎乗の恥ずかしさに震えているグレイスの薄い桃色の媚肉を、アリオンは精一杯の感謝を込めて舐めしゃぶる。

「そのガラの悪いオナゴは、一度満足しているようね。それならばケイトの背後から回

って胸を揉んでやりなさいな」

「あんたの上からの視線は気に入らないけど、まあ、従ってやるよ」

フリーネの指示に不満をいいながらも、マディアはいたって素直にケイトの背後に回るや、前方飛びだし型おっぱいを握りしめる。

「ふんっ、爆炎の赤獅子は忠義の士というよりも、ただのショタコンだったわけか」

「や、やめろ。あ、貴様っああ……」

宿敵と目する女に背後を取られるのは愉快ではないだろう。身悶えるケイトの背中に、マディアはこれ見よがしに自らの巨大な乳房を押しつける。それから国宝級おっぱいを揉みしだいた。

「ふふふ……グレイスちゃん。そのままケイトのおっぱいに吸いついてあげなさいな」

「はあ、あん……」

クンニされているグレイスはとろとろになりながらも、フリーネのいわれるままに身を前かがみにしてケイトの乳房に吸いつく。

「はあん♪ はあああああ〜ん♪」

もともと乳房の弱いケイトである。たまらず天を仰いで嬌声を張り上げると、膺のほうもキュッキュッと締まってきた。

その心地よさに溺れたアリオーンは、夢中になって腰を上下させてしまう。

「はあん♪ で、殿下、殿下のものが、奥に……奥に当たって、はあん♪」

普段の凛々しい顔からは想像もできないアヘアへといたただらしなないケイトの喘ぎ声を聞きながら、グレイスの包茎陰核に吸いついていたアリオーンが、場を仕切っている女性に呼びかける。

「フリーネさま……、フリーネさまは参加してくれないんですか？」

水を向けられたフリーネは顔をしかめる。

「申し訳ありませんわね。あたくし殿下とは一度きりと決めておりますの。いまヴィオールを連れてきますから、あの娘をこの宴に参加させてあげてくださいな」

「そんな……ヴィオも魅力的だけど、で、でも……フリーネさまは、その大人の色気がムンムン……その……すごく魅力的です」

娘よりも魅力的だといわれるのは、女としての自尊心をおおいに満足させられたのだから。フリーネは綻びそうな口元を扇子で隠す。

「まったく口が上手いですわね。ですが、ダメですわ」

びしりと断られてショックを受けたアリオーンに代わって、ケイトの乳房を揉みしだいていたマディアが口を挟んできた。

「お高くとまってないでとっとと来な。あんたも殿下の女なんだろ」

そこに騎乗位で喘ぐケイトが宥める。

「む、無理をいってはいけない。フリーネどのの御年を考えろ」

「そうですね。オバさまは立派なお方ですけど、女としての盛りは過ぎましたわ」

よせばいいのに顔面騎乗のグレイスマで余計なことをいった。

(ひいえー……みんなってば、フリーユネさまになんという暴言を……)

震えあがるアリオーンを余所に、玲瓏たる貴婦人は、慌てず騒がず、すっと氷の眼差しを細めると、右手で持った扇子を、パンッと閉じる。

「子供も産んだことのない小娘たちの分際で、いいたい放題いつてくださいましたわね。よろしいですわ。今宵は無礼講ということで参加して差しあげます」

宣言と同時にフリーユネは瑠璃色のドレスを脱ぎ捨てる。中から出てきたのは、白磁の肌を彩るセクシーランジェリー。胸の大きさは、ケイトやグレイスのほうがあつた。しかし、女の色香と胸の大きさや若さは関係ないものらしい。

むせ返るような色香を撒き散らすフリーユネは、騎乗位で繋がっているケイトの結合部に顔を埋めてきた。

「ひい、ひい……そ、そこはやめてください、フリーユネさま……ああ、だ、ダメ」

どうやらフリーユネは、ケイトの陰核をペロペロと舐めているようだ。紅の女騎士はピクピクと身悶えた。それに合わせて、腔洞のほうもキュッキュッキュッと締まってくる。

(くう、もしかしてみんなはぼくの望み通り、フリーユネさまを参加させるために、わざと暴言を吐いたのかなあ。だったら、みんなのためにこれからもっと頑張らなくちゃ)

顔にはグレイスマ、下半身にはケイトとマディア。さらにフリーユネの頭の重さまで加わったわけで、それは相当の重量があつたが、アリオーンは一生懸命に腰を上下させた。

グチュブチュ……ブチュチュ……。

男女の結合部から溢れる愛液を舐め取るフリーユネが嘲笑した。

「あらあら、澄ました顔しているのに、あなたがいぶんとだらしのないおま○こしているのね。まるでおしっこもらしているみたいですよ」

「そ、そんな……」

恥じ入るケイトの乳首を舐めていたグレイスがはずけずけといいつのる。

「いまさらカマトトぶるんじゃありませんわ。あなたがむつつりスケベで、アリオーンを淫らな目で見ていることを、わたくし昔から気づいておりましたわ」

背後から乳房を揉みしだくマディアが嘲笑する。

「くっくっくっ……それじゃ、おまえのこのでっかいおっぱいは殿下のことを思って、オナニーしすぎた結果なんだな」

「そ、そんなことは……はが、ひい、はああああ……」

アリオーンの逸物を挿入された状態で、背後からマディアに乳房を揉まれ、その乳首をグレイスに吸われ、陰核をフリーユネに舐められるという、四点責めでケイトの肉体は限界まで追い詰められていたというのに、同性ならではの容赦のない言葉責めに、精神的にも追い詰められたケイトは、涎を噴き、涙を流して悶絶する。

「あああああお、おああ……あああああおつ!!!」

正体をなくして絶叫している女の膣穴は狂ったように収縮し、逸物を吸いたててきた。



（うわあ、ケイトってばイっちゃってる。でも、すごい長い。もしかして、これが噂のいきっぱなし状態!?）

キユッキユキュッ……と心地よく締める絶頂痙攣に釣られたアリオーンは、グレイスの愛液でベトベトになりながらも、腰をガツガツと突きあげて叫んだ。

「くう……、きた、ケイト、ぼく、ケイトのこと大好きだよ!!!」

「わ、わたし……も、殿下、殿下のことが、大好きでえすッ!!!」

ドビユドプユドブユウウウウ……!!!

臨界点を越えた男根の先端から熱い血潮が噴き出す。

「ラメ、ラメ、ラメ、ラメエエエエエエエエエエエエエッ!!!」

愛しい主君からの膣内射精を食らった爆炎の赤獅子は、精液によって子宮から喉まで貫かれたかのように、天を仰いで絶叫した。

忘我の境地に達したケイトがぐったりと倒れる。満足したアリオーンも呆けていると視界が開けた。顔に座っていたグレイスがどいたのだ。

「なにが、ケイトのこと大好きだよっ、ですよ。アリオーンはわたくしのことが好きだっっていつてくださってたでしょ」

頬を膨らませて睨んでくるグレイスを見て、アリオーンは震えあがった。

「あ、ああ……もちろんだよ……」

動揺しているアリオーンをまえに、マディアとフリーユネが呆れ顔で肩を竦めている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

